

《研究ノート》

大学への進学理由と入試形態の関係

—大学入試研究の経緯を踏まえて—

西 丸 良 一

本稿は、大学に入学した学生の進学理由と受験時に用いた入試形態の関係を検討した。分析の結果、進学理由は利用した入試によって異なるが、学生の出身高校を統制すると、その差は確認できない。つまり、進学理由の差は高校タイプの差によって生じているということだ。ただ、大学で就学不適應を起こし、中途退学してしまう学生は、利用した入試の違いによって生じている可能性は十分考えられる。そうしたことは、これまでに全国規模で実証されていないため、本稿で用いたデータを軸に、今後、追跡調査を実施する予定である。

1. はじめに

周知のとおり、大学入試は推薦入試やAO入試に代表される、あまり学力を問わない入試によって多様化した。2017年度、推薦入試やAO入試などで入学した学生は国公立大学で18.8%、私立大学で51.5%となっており、日本の高等教育を大きく占める私立大学を中心に実施されている。推薦入試やAO入試は、それほどめずらしい入試ではなくなったといえよう。

こうした学力を問わない入試は、学力偏重による過度の受験準備教育に対する批判から生じ、その背景には、第一次ベビーブーム世代の大学入学志願者の増加があった。進学率の上昇とベビーブーム世代が同時に到来したことで生じた教育拡大期において、受験競争への批判が高まり、推薦入試が登場したのである。こうした経緯で登場した推薦入試を中村（2011）は、これまでの学力試験中心の選抜に修正を迫ったものとして位置づけている。

あまり学力を問わない入試は、高等教育の量

的拡大ともなあってあらわれたのだが、こうしたことは、高等教育への在籍率を軸に、高等教育の発展段階を説明したトロウ（1973=1976）によって、すでに示唆されていた。トロウによると、高等教育への進学が、限られた一部によってなされる「エリート段階」の入試は、学業成績といった能力主義的な基準によっておこなわれるが、高等教育への進学がある程度、拡大した「マス段階」になると、それとは関係ない選抜基準も入試に採用されるという。

また、トロウの高等教育の発展段階説は、入試における選抜基準の変化だけでなく、進学に対する学生たちの意識の変化も説明する。一部の進学準備校によって高等教育への入学が、事実上、独占されているエリート段階の場合、学生は特権的な機関に属していると感じる。しかし、高等教育への在籍率が上昇し、マス段階になると、そうした排他的な結びつきは弱められ、一定の資格要件を満たすのだから、大学に入学する権利があると考えたり、義務と感じたりする学生が増加していく（Trow 1973=1976: 84-

91)。日本の場合、第一次ベビーブーム世代によって生じた教育拡大や受験競争批判が、トロウの示すエリート段階からマス段階への移行時期にあたる。その時期にあらわれた学業成績とは関係のない選抜基準を採用した推薦入試を、中村（2011）は「マス選抜」と捉えたのだ。

その後、第二次ベビーブーム世代が過ぎ、18歳人口は減少するが、大学の入学定員は拡大していった。第二次ベビーブーム世代のなかでも、出生数の多い1973年生まれが、大学入学期をむかえる1991年度と現在（2018年度）の大学入学者数をくらべると、11.7万人の増加（52.1→62.8万人）となっている。こうした傾向に大きな影響を与えているのは、日本の高等教育を大きく占める私立大学の経営的側面にある（荒川2011）。私学の場合、学生定員が経営基盤を大きく決定するため、少子化といえども、定員数をこれまでと同等以上に確保する必要がある。私学の経営的側面からみれば、推薦入試やAO入試は、学力という名の入学障壁を引き下げる術に都合がよく、新たな入学者を掘り起こした（荒井2011: 13）といえるのかもしれない。事実、小川（2016）は私学において、推薦入試やAO入試など、あまり学力を問わない入試が定員管理に重要な位置づけにあることを示す。能力主義的な基準の入試が用いられたエリート段階からみれば、現在の推薦入試やAO入試は、新たな入学者を掘り起こしたと揶揄する見方も可能であろう。

では、推薦入試やAO入試によって掘り起こされ、大学に入学した学生はどのような学生であろうか。トロウは高等教育がマス段階に達したとき、学生は大学に入学することを、権利や義務といった大衆的な意識をもつようになることを示した。現在の日本は、推薦入試やAO入試を利用する学生がめずらしくなくなったとはいえ、一方で、エリート段階の入試といえる学

業成績を基準とした一般入試が存在する。つまり、高校卒業後の進路が同じ大学だとしても、利用した入試の違いによって、学生の意識に差が生じている可能性が考えられるのだ。こうした関心から、本稿は、大学に入学した学生の進学理由と受験時に利用した大学入試の関係を検討する。

2. データについて

ここまで述べてきたように、高等教育の大衆化に対応するかたちで変容した大学入試だが、実は、大学入試を対象とした実証的な研究はそれほど多くない。中村（2011: 79）も指摘しているが、1967年度前後に公認された推薦入試は、その後、規模を拡大してきたにもかかわらず、研究の対象にされることはあまりなかった。1991年に『大学入試研究ジャーナル』が発刊されたこと、近年、国立大学を中心にアドミッションオフィスが設置されることによって、大学入試を実証的に検討しようとする動きはある。だが、その多くは各大学単体の事例的（マーケティング的）研究でしかない。

中村（2007: 103）は、高等教育学会において、身近な知り合いの担当する授業時に調査票を配布し、作成されたデータを分析するものが多いことを指摘する。この指摘は、先ほど述べた、各大学が個別に所有するデータで大学入試を検討しようとする現状にも当てはまる。そうしたデータを用いた研究が掲載されている『大学入試研究ジャーナル』を対象に、西郡（2011）がレビューした結果、入試研究の主要テーマである入試方法の妥当性を検討する研究に、汎用的な追跡調査の方法や共通的に援用できる分析結果はほとんど存在しないと結論づけている。推薦入試やAO入試などによって様変わりした大学入試が事例的研究の域を出ないこと、西郡

(2011)の示すように、入試研究において一般化できる知見がみられないこうした背景の一人は、代表性のあるデータを分析に用いることがなされていないと考えられるのだ¹。

とはいえ、大学入試を対象としたテーマを検討するために、代表性のあるデータを作成することは難しい。特に、本稿のテーマである大学への進学理由と大学入試の関係を検討する場合、大学受験を目前に控えた高校3年生や大学に入学したばかりの大学1年生を調査対象者としなければならない。代表性を担保するため、調査対象となる高校3年生や大学1年生を抽出するための名簿が必要になるが、この名簿にあたるものへのアクセスが困難なのである。そうしたなか、日本学生支援機構のおこなう「学生生活調査」は、全国の大学を対象に、調査対象となる学生をランダムに抽出している。調査対象を抽出するための名簿は、各大学の担当者に作成を依頼し、その名簿を用いて対象者の抽出、対象者に調査票の配布・回収までを各大学の担当者に依頼している。代表性のあるデータを作成するならば、こうした方法がもっとも望ましいが、一研究者のおこなう調査の域を大きく超えた作業といっていいただろう²。

大学入試を実証的に研究するこれまでの経緯

- 1 もちろん、検討テーマによって、ランダムサンプリングである必要はない場合もある（例えば、濱中・山村・鈴木(2014)や山村・濱中(2018)など）。また、どのような調査であっても、現実的な制約は存在する。ただ、その場合に生じてしまうサンプルの偏りは十分に把握しておく必要がある（中村 2007）だろう。
- 2 他にも、東京大学大学経営・政策研究センターの実施した「高校生の進路についての追跡調査」は、全国規模で、二次分析が可能な数少ないデータといえる。しかも高校3年生を調査対象とし、その後、6年間で追跡するパネル調査をおこなっている。ただし、第一回目の調査実施は2005年11月であるため、やや古いものとなりつつある。

や置かれた現状を踏まえ、本稿で用いるデータは、インターネット調査会社の登録モニターである全国の大学1年生と2年生を対象に、2018年7月に調査を実施し、作成した。当然、調査対象者はインターネット調査会社の募集に自ら応募しているため、本稿のデータは有意抽出で作成されたものになる。しかし、先に述べたとおり、調査対象者をランダムサンプリングする困難さを鑑みれば、現段階において、この代替案がもっとも現実味を帯びた調査方法であると判断した。

次に、調査設計について説明する。先ほどから述べているとおり、本稿は大学への進学理由と大学入試の関係を検討する。そのため、受験時に考えていた進学理由をできるだけ正確な状態で回答してもらう必要があり、当初は、入学してまもない大学1年生を調査対象としていた。しかし、調査会社における大学1年生のモニター登録が少ないことが判明した³。サンプルサイズが小さすぎると、多変量解析に対応しきれない懸念もあったため、受験時の状態をある程度正確に回顧できるだろう大学2年生も調査対象に含めることにした。

スクリーニングは、性別、大学の設置者、利用した入試方法をもとにおこなった。性別の割り当ては「平成29年度学校基本調査」から、大学に入学した男女比を算出して用いている。利用した入試方法の割り当ては、「平成29年度国公立大学入学者選抜実施状況」を用い、大学の設置者別に一般入試とその他（推薦入試やAO入試）の入試で入学した比率を用いた。表1は性別と学年のクロス集計、表2は大学設置者と入試方法のクロス集計を用いて、データの内訳を示している。

- 3 複数の調査会社に依頼をしたが、いずれも大学1年生のモニター登録が少ないとの回答を得た。

表1 調査対象者の性別と学年

	大学1年	大学2年	合計	N
男性	54.5%	45.5%	100.0%	365
女性	53.9%	46.1%	100.0%	308
合計	54.2%	45.8%	100.0%	673

表2 調査対象者の大学設置者と利用した入試

	一般	推薦	合計	N
国立	83.3%	16.7%	100.0%	114
公立	70.0%	30.0%	100.0%	30
私立	48.2%	51.8%	100.0%	529
合計	55.1%	44.9%	100.0%	673

表3 入試別にみた「高い学歴をつけた方が就職に有利」

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる	合計	N
一般	3.0%	10.0%	43.4%	43.7%	100.0%	371
推薦	4.3%	13.9%	45.7%	36.1%	100.0%	302
合計	3.6%	11.7%	44.4%	40.3%	100.0%	673

つぎに、利用した入試ごとに大学への進学理由の分布を確認する。ここまでにも述べてきたとおり、大学入試は多様な方法でおこなわれている。また推薦入試やAO入試といっても、その選抜方法は各大学でかなり異なっており、その内容までを把握することは難しい。そこで本稿は、一定の場所で、一斉におこなう学力筆記試験を「一般入試」とし、その他の入試を「推薦入試」とした。多様化した大学入試を検討するにもかかわらず、大学入試を2分類で検討することは、やや心許ないが、あまり細かな分類をおこなうと、サンプルサイズの問題が生じて

しまう⁴。ここで用いる大学への進学理由は、「高い学歴をつけた方が就職に有利」「高度な学問的知識を身につけたい」の積極的な進学理由と、「就職するのがイヤだから」「将来の進路をゆっくり考える時間がほしい」の消極的な進学理由の4つである。

では、これら4つの進学理由の分布を確認する。表3は、「高い学歴をつけた方が就職に有利」

4 調査する段階では、いくつかの入試方法を選択肢に設け、回答を得ている。その内訳は以下の通りである。一般入試（センター利用含む）：371、附属高から進学：38、指定校推薦：107、AO入試：48、推薦入試：88、その他：21。

表4 入試別にみた「高度な学問的知識を身につけたい」

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる	合計	N
一般	3.5%	17.0%	44.7%	34.8%	100.0%	371
推薦	3.3%	16.6%	51.3%	28.8%	100.0%	302
合計	3.4%	16.8%	47.7%	32.1%	100.0%	673

表5 入試別にみた「就職するのがイヤだから」

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる	合計	N
一般	18.9%	37.2%	28.0%	15.9%	100.0%	371
推薦	13.9%	36.8%	30.1%	19.2%	100.0%	302
合計	16.6%	37.0%	29.0%	17.4%	100.0%	673

表6 入試別にみた「将来の進路をゆっくり考える時間がほしい」

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる	合計	N
一般	3.5%	16.2%	38.0%	42.3%	100.0%	371
推薦	4.3%	15.6%	40.7%	39.4%	100.0%	302
合計	3.9%	15.9%	39.2%	41.0%	100.0%	673

の分布である。若干ながら、推薦入試より、一般入試で入学した学生は、高い学歴をつけた方が就職に有利と考え、進学したようにみえる。表4は、「高度な学問的知識を身につけたい」の分布であるが、これも推薦入試より、一般入試で入学した学生の方が、そのように考えていたようすがうかがえる。大学進学における積極的な進学理由は、推薦入試より一般入試を利用して入学した学生に多いのかもしれない。

つぎに、「就職するのがイヤだから」の分布を確認する。表5をみると、一般入試より、推薦入試で入学した学生の方が、「就職するのがイヤだから」を進学の理由としていた傾向にあ

る。「将来の進路をゆっくり考える時間がほしい」を示した表6は、利用した入試の違いによる差をほとんど確認できない。

3. 分析

ここまでに、本稿の分析に用いる大学への進学理由をみてきたが、当然ながら、進学理由といった意識は、他の意識と何の関連もなく示されるものではない、例えば、「高い学歴をつけた方が就職に有利」と考えながら、大学で「高度な学問的知識を身につけ」なければならないと考えていたのかもしれない。また、「就職す

表7 利用した入試と進学理由の関係

	モデル1		モデル2	
	B	S.E.	B	S.E.
(定数)	.224	.484	-.529	.524
学年 (1年=1、2年=0)	-.043	.158	-.044	.170
性別 (女性=1、男性=0)	.083	.157	.159	.167
高い学歴を身につけた方が就職に有利 (4段階)	-.235 *	.108	-.118	.115
高度な学問的知識を身につけたい (4段階)	.028	.107	.025	.114
将来の進路をゆっくり考える時間がほしい (4段階)	-.068	.101	-.142	.108
就職するのがイヤだから (4段階)	.176 *	.086	-.131	.092
高校 (ref.普通科A (60.0～))			—	—
普通科B (~59.9)			1.066 **	.180
職業科			2.450 **	.359
通信／他／未			1.030 **	.344
-2LL	915.928		838.133	
Nagelkerke's R ²	.020		.164	

N=673 ** p<0.01 * p<0.05

るのがイヤだから」大学に入学し、「将来の進路をゆっくり考える時間がほしい」と思っていたのかもしれない。さらには「高度な学問的知識をみにつけ」ながら、「将来の進路をゆっくり考え」たいと思っていたのかもしれない。このように考えれば、ここで示されたそれぞれの進学理由は、それぞれ重複している可能性がある⁵。また、これら進学理由は、出身高校がどのような高校であったかとも関係する。中村(2010)は、進路多様校の生徒にとって、推薦入試やAO入試は、これまでの進路希望が就職だった高校生を、大学へ変更させる可能性を示す。一般入試にくらべ、推薦入試が学力を問わ

ない入試で、大学入学が可能なのであれば、当然、入試の準備にそれほど時間を要しない。高校卒業後は就職を考えていたが、大学へ進学するといった進路変更をおこなっても、推薦入試やAO入試なら合格する可能性は十分あるだろう。

では、それぞれの進学理由はそれぞれが独立して、利用した入試形態と関係しているのだろうか。また、進学理由は出身高校と独立して、利用した入試形態と関係しているのだろうか。これらを確認するため、利用した入試が推薦入試なら1、一般入試なら0としたものを従属変数とするロジスティック回帰分析の結果を検討する。

まず、表7のモデル1から検討する。モデル1は利用した入試形態に対し、4つの進学理由が独立して関係しているのかを示したものにな

5 実際に、「高い学歴を身につけた方が就職に有利」と「高度な学問的知識を身につけたい」の相関係数は.329となっている。詳しくは付表1を参照されたい。

る。基本属性である学年と性別も統制しているが、これらと利用した入試との関係は確認されていない。進学理由のうち、統計的に有意なものは「高い学歴を身につけた方が就職に有利」と「就職するのがイヤだから」である。「高い学歴を身につけた方が就職に有利」はマイナスの影響を示しており、就職に対する学歴の便益を考える学生は、一般入試を利用し、大学に入学していることをあらわす。一方、「就職するのがイヤだから」はプラスの影響を示している。就職を避けて大学に入学した学生は、推薦入試で入学する傾向にあるということだ。

では次に、学生の出身高校を追加した分析結果を検討する。出身高校の分類は、高校の学科と入学難易度を用いて4つに分類した。工業科や商業科といった普通科以外の高校は「職業科」とし、普通科の高校は入学難易度60.0以上を「普通科A」、それ以下を「普通科B」としている。また、少なからず出身高校が通信制や定時制となっているものもあるが、サンプルサイズの関係上、出身高校が判別不能、もしくは未回答であるケースと同じ分類とした⁶。出身高校が中高一貫校の場合、入学難易度はつかないが、その中高一貫校の進学状況のようすから、普通科Aに含めている⁷。

出身高校を含めたモデル2をみると、普通科Aを基準とした場合、「普通科B」「職業科」「通信／他／未」を出身高校とする学生は、推薦入試を利用し、大学へ入学している傾向にある。特に、職業科を出身高校とする学生にその傾向は強い。こうした高校タイプによる大学入試の利用傾向は、山村（2010）や中村（2011）など、先行研究における結果と整合的である。

やはり、あまり学力を問わない推薦入試は、学力の低い出身高校の学生に利用されるのであろう。その一方、進学理由をみると、モデル1で確認された「高い学歴を身につけた方が就職に有利」と「就職するのがイヤだから」の影響が示されていない。つまり、こうした進学理由は高校タイプと関係しており、学力の高い出身高校の学生ほど、学歴による便益を考えて一般入試を利用し、進学している傾向、出身高校が進路多様校の学生ほど、就職の回避を考えて推薦入試を利用し、進学している傾向にあるということだ。

4. まとめと今後の課題

本稿は、トロウの高等教育の発展段階説を踏まえ、大学に入学した学生の進学理由と受験時に利用した大学入試の関係を検討してきた。分析の結果、利用した入試によって、大学への進学理由に差は生じていた。マス段階の入試といえる推薦入試やAO入試と、エリート段階の入試といえる一般入試が共存する日本の高等教育において、こうした進学理由の分化は、マス段階への移行とともに進学に対する学生の意識が大衆化するというトロウの示唆と整合的といえる。しかし、学生の出身高校を統制すると、進学理由と利用した入試との間に独立した関係は示されず、どちらの入試を利用し、大学へ入学したとしても学生の進学理由に差はないことが示された。結局のところ、進学理由の差は高校タイプの差によって生じているということだ。

大学進学が大衆化するなかで、古田（2015）は学校に否定的な感情をもち、学歴による便益を感じていないにもかかわらず、親子で大学進学を希望する「曖昧な大学進学層」が存在することを示す。こうしたことは、学歴による便益を考慮せず、就職回避を理由に、進路多様校の

6 高校の入学難易度は「家庭教師のトライ」を用いた(2018年12月11日取得、<https://www.trygroup.co.jp/exam/high/>)。

7 高校タイプの内訳は付表2に示している。

生徒が推薦入試やAO入試で大学に入学していることを示した本稿と類似した結果である。他方で、トロウは高等教育の発展段階説において、マス段階になると学生の質が多様になり、中途退学者が増えることを示す（Trow 1973=1976: 68-9）。これらを勘案すれば、大学入学後、就学不適応が生じ、中途退学してしまう学生は、推薦入試やAO入試で入学した学生に多い可能性は十分考えられる。

ただ、ここで述べたような「進学理由—大学入試—就学適応」の関連メカニズムを実証的に示した研究は、あまりおこなわれていない。さらに、全国規模のデータを用いた実証的研究は、なおさら見当たらない。高大接続改革や入試改革の議論がさかんにおこなわれているにもかかわらず、実証的な知見は意外と示されていないのである。先述したように、分析に利用可能なデータが少ないことも原因になっているだろう。こうした現状を踏まえ、今後は本稿で用いたデータを軸に、学生生活における適応感、大学での学業成績などの追跡調査を実施する予定である。こうしたデータの分析が可能となれば、高大接続改革や入試改革の議論だけに限らず、高等教育にかんするさまざまな研究など、近隣領域にもあらたな知見が提供できるだろう。

<付記>

本研究は、JSPS科研費（課題番号18K13088）の助成を受けたものです。

<参考文献>

新井克弘，2011，「高大接続の日本的構造」『高等教育研究』14: 7-19.

古田和久，2015，「「学校不適応」層の大学進学——出身階層、学校生活と進路希望の形成」中澤渉・藤原翔編『格差社会の中の高校生——家族・学校・進路選択』勁草書房，37-52.

濱中淳子・山村滋・鈴木規夫，2014，「高校一年次の学習時間——そのばらつきと背景を探る」『大学入試研究ジャーナル』24: 15-20.

中村高康，2007，「高等教育研究と社会学的想像力——高等教育社会学における理論と方法の今日的課題」『高等教育研究』10: 97-109.

——編，2010，『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房.

——，2011，『大衆化とメリトクラシー——教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会.

西郡大，2011，「個別大学の追跡調査に関するレビュー研究」『大学入試ジャーナル』21: 31-8.

小川洋，2016，『消えゆく「限界大学」——私立大学定員割れの構造』白水社.

Trow, M., 1973, "Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education," (=1976, 「高等教育の構造変動」天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版会).

山村滋，2010，「高校と大学の接続問題と今後の課題——高校教育の現状および大学で必要な技能の分析を通して」『教育学研究』77(2): 157-70.

——・濱中淳子，2018，「高校一年次の学習時間——定期考査および大学入試方法との関係性を中心に」『大学入試ジャーナル』28: 87-92.

<付表>

付表 1 大学への進学理由の相関係数

	①	②	③
①高い学歴を身につけた方が就職に有利			
②高度な学問的知識を身につけたい	.329 **		
③将来の進路をゆっくり考える時間がほしい	.234 **	.143 **	
④就職するのがイヤだから	.038	-.107 **	.281 **

N=673 ** p<0.01

付表 2 高校タイプの内訳

	N	%
その他・未	28	4.2
通信	14	2.1
職業科	62	9.2
普通科B (～59.9)	257	38.2
普通科A (60.0～)	288	42.8
中高一貫	24	3.6
合計	673	100.0

(にしまる りょういち、本学科助教)

